

令和5年度 全国農業委員会会長代表者集会

若者が帰り、 遊休農地を活力ある大地に

—園地整備で豊かな郷土づくり—



長野市農業委員会会長 青木 保

本日お話することは

1. **～動画～**（今の、長野市若穂綿内地区の状況など）
2. たくさんの地域課題について
3. 課題解決に向けた取り組みについて
4. 整備事業の導入に向けた取り組みと事業の効果について
5. これからの産地づくりについて
6. 地域計画の策定に向けて

地域の課題

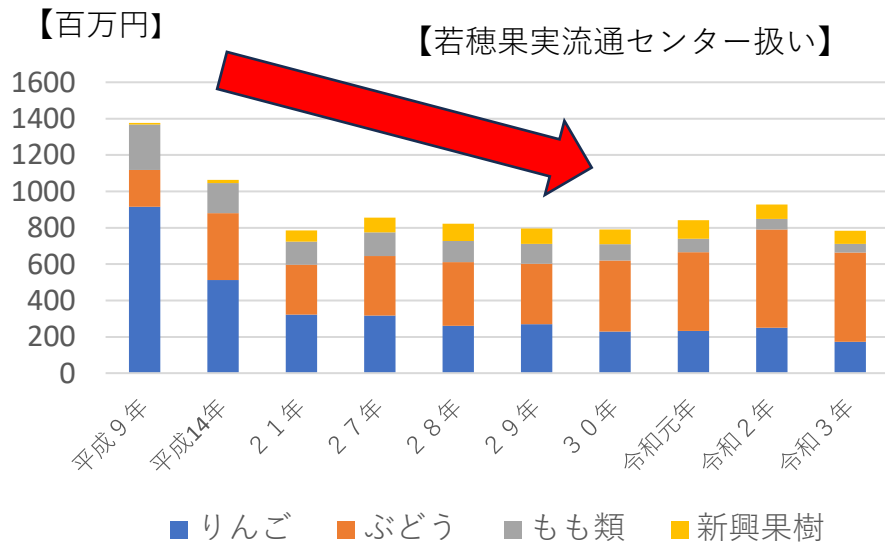
長野市若穂(綿内東町地区)の場合

(果樹栽培地域)

1. 進む荒廃農地の拡大

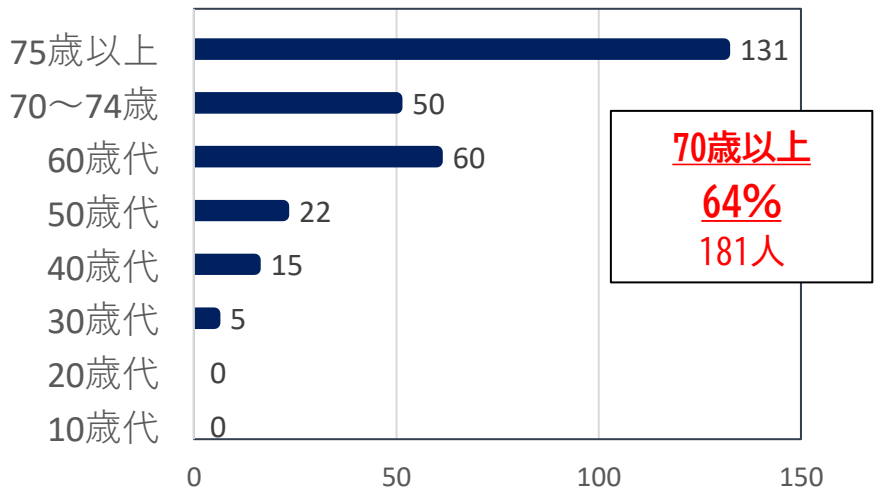
- ① りんごの特産地として活気ある中山間園地 (～平成前半)
- ② 高齢化・担い手減少で35%の荒廃園地が発生 (平成後半～)

2. 地域農業の過去と現状 生産出荷額の推移



基幹的農業従事者数 年齢構成

(2020年農業センサス「長野市綿内地区」より)



私達地域の課題 10年後を見据えて

< 人・農地プランの実質化作業時における課題の抽出 >

1. 地区全体において高齢化が進み、後継者・担い手パワーが不足
2. 果樹園の放棄園の増加、集約集積への条件整備が困難
3. 農村集落の景観・環境の変化や施設保全が困難である
4. 果樹農家の中には規模拡大を希望しているが、労働力確保が困難
5. 有害鳥獣被害による損失とモチベーションの低下

私の地域課題と対策の実践

遊休農地の拡大

— 中山間地区の果樹園の担い手不足 —

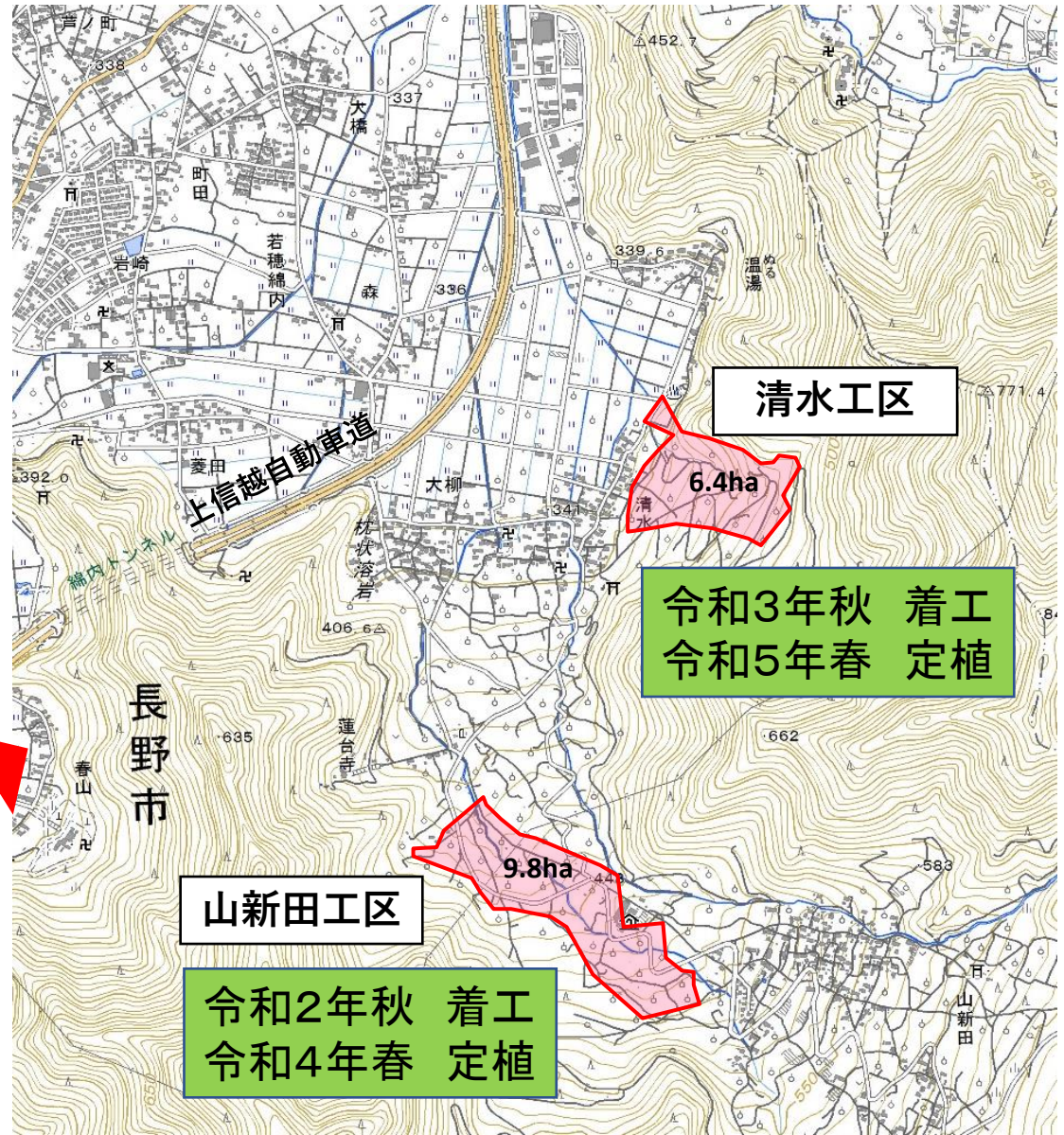
農用地基盤整備事業の導入

(平成27年スタート)

農用地基盤整備の導入



長野市



綿内東町地区農地中間管理機構関連農地整備事業
山新田工区 現地航空写真 (拠点 - その1)



【南側より北方視】

綿内東町地区農地中間管理機構関連農地整備事業
清水工区 現地航空写真 (拠点一その2)



【南側より北東方視】

【整備イメージ】

傾斜地の樹園地をテラス状に整備

SSの安全な走行が可能

ラジコン型草刈機の導入

【点滴灌水設備】



将来的な、除草や防除作業の無人化にも対応

【高所作業車の活用】



【ラジコン型草刈機導用】



【新ワイ化栽培方式】



国の制度に対する地元の不安
整備事業事前検討での地元課題

1. 対象農地の8割以上を担い手に集約
* 認定農業者(中心経営体等)の確保
2. 15年以上の期間、中間管理権の設定
* 管理権設定前に売買希望の農家に対する所有権移転の処理
3. 農地面積(受益面積)10ha以上で換地有り
* 集積・集約が可能か?・規模の確保
地権者の換地制度の理解・協力は?
4. 事業完了5年以内に販売額20%以上向上
* りんご栽培の革新的技術「新ワイ化栽培」の導入検討
5. 収益稼働中の圃場に対する経済的支援なし
* 営農の保障についての理解

事業導入までの組織と行動

一 人・農地プランの実践活動 一

1. 地元住民の合意形成
 - * 数十回に及ぶ地元事前説明会・広報紙の発行
2. 事業導入準備会・実行委員会等の組織強化
 - * 農業委員・最適化推進委員の中核的役割
3. 地権者・耕作者の意向確認
 - * アンケートの実施 ・個別面談 ・家庭訪問
4. 担い手候補者(認定農業者)の意向確認
 - * アンケートの実施 ・懇談会の開催 ・営農計画
5. 地元JA(グリーン長野農協)の積極的支援 (人・場所)
 - * 役員理事 ・ 支所職員の常時参加
6. 行政の全面的支援 (個人情報関連はすべて依頼)
 - * 県農政部・長野地域振興局・県土地改良事業団体
市農林部・市農業公社

事業導入の流れ

平成27年

- ・農業委員研修会で国の事業計画(案)を学ぶ
- ・地元議論の受け皿として準備会の設立

平成28年

- ・事前調査と地元の意向把握 ・ 果樹振興の将来像を議論
- ・県、市、JAへのアプローチ作業

平成29年

- ・中間管理機構制度を受け入れるための地元条件整備
- ・国への採択要件の理解と地元関係者(地域・地権者・担い手)の合意作業

平成30年

- ・国への採択要件整備の準備
- ・外郭設計・換地割込み地権者理解作業(山新田工区)

令和元年

- ・国の事業計画採択と実行委員会の設立(部会の設置)

令和2年

- ・詳細設計・換地割込み作業(山新田工区)
- ・施工業者の確定と工事スタート(山新田工区)

令和3年

- ・詳細設計・換地割込み作業(清水工区)
- ・担い手入植者の予定圃場・営農計画の確認

令和4年

- ・担い手入植者営農開始(山新田工区)
- ・担い手入植者の予定圃場・営農計画の確認(清水工区)

令和5年

- ・担い手入植者営農開始(清水工区)

事業導入採択までの流れと組織、行動

(平成27年 ~ 28年)

住民主導で事業を進めるための合意形成

- 地域の中心人物5名を選出し、活動の核になってもらった。農業委員経験者が人選に奔走する。
- 綿内地区全体で目標を共有できるメンバーを選出して準備会を設立した。(区長経験者・専業農家・親元就農者・地域有識者等)
- 住民を説得するための資料を作成した。(実情とビジョン、準備会)
- 集落懇談会等の実施。(チラシを作成し繋がりのある人から配布)
- 欠席者への個別対応。(資料の提供・訪問)

事業の採択要件をクリアするための合意形成

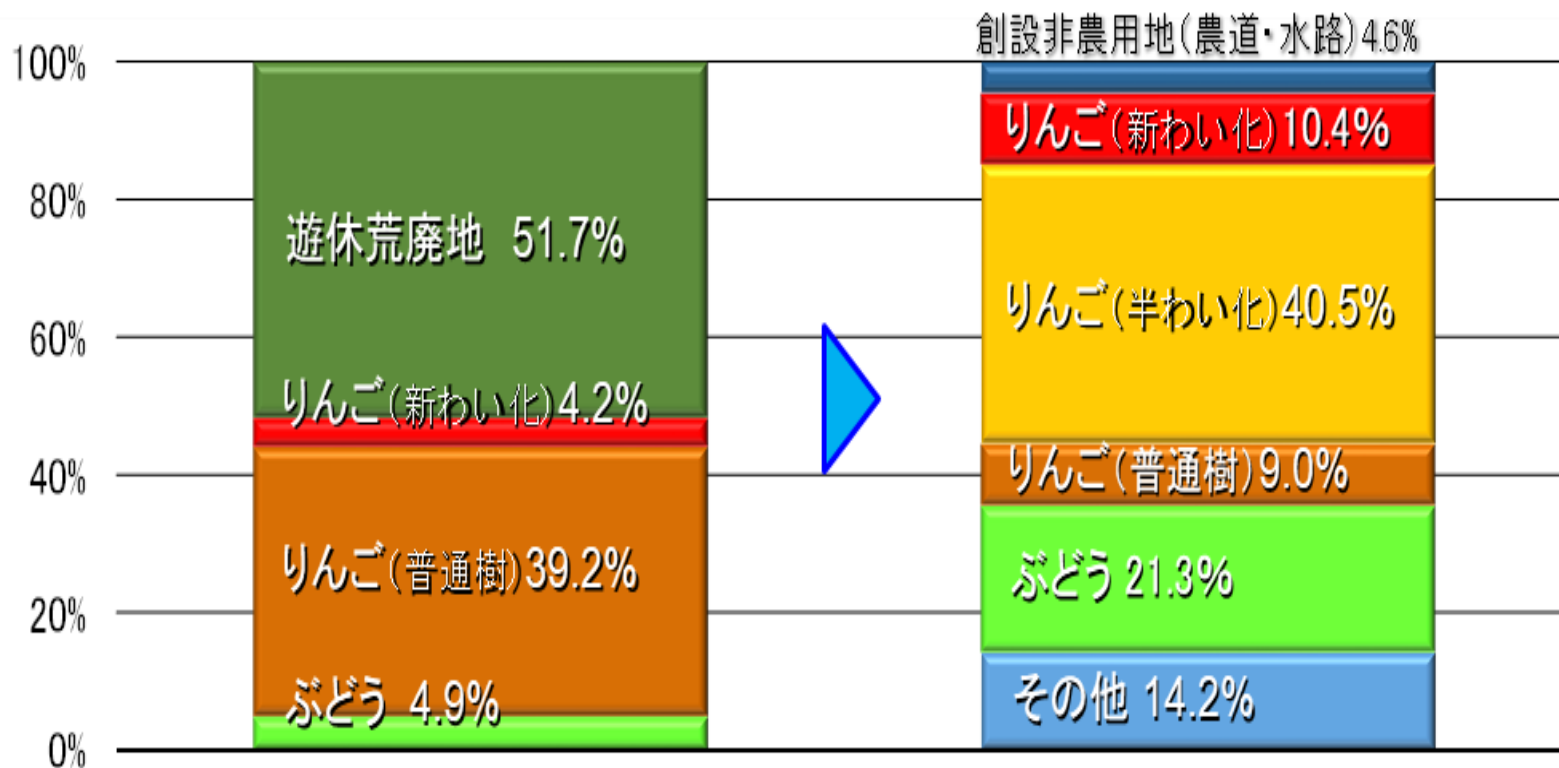
(平成29年 ~ 令和元年)

- 地区がまとまり行政等へ相談し、各種支援を受けた。
- 実行委員会に3部会(農地、換地、担い手)を設置した。
 - 以下の採択要件クリアに向けた取り組み —
- 対象農地の8割以上を担い手に集約
- 15年以上の期間を中間管理権の設定 → 離農農家の農地の買取？
- 農地面積10ha以上で換地有り → 換地に対する地権者のこだわり
- 販売額の向上に向け「新ワイ化栽培」技術等を導入 → JA等の支援
- 成園伐採への経済的支援無し → 成園代替え地の斡旋

整備実施後の効果 ①

【工区全体】

作物別面積割合



【 整備前 】

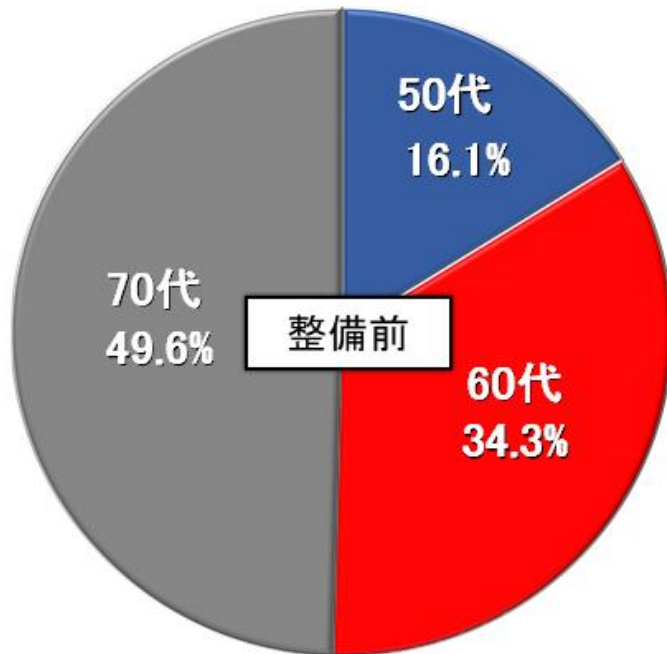
【 整備後 】

整備実施後の効果 ②

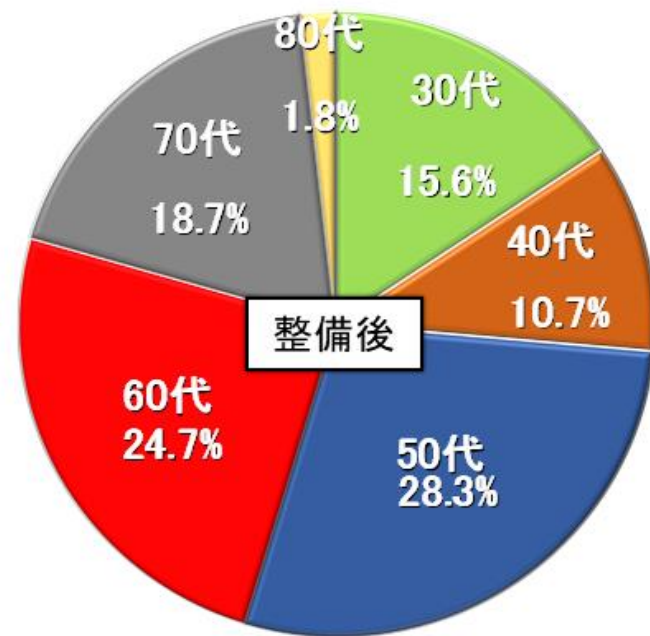
【工区全体】

担い手年齢構成

- * 世代交代
- * 新規就農者
- * 既存営農者の規模拡大



【 整備前 】



【 整備後 】

新しい農地で産地復活を求めて

1. DXによる省力化と作業の安全確保
(事業効果の結果を出す)
→ 除草、防除、一般作業の効率化
2. 品質確保と規模拡大による安定した営農と売上げ
→ 担い手の継続確保
3. ブランドの復活
→ 立地条件を生かした栽培戦略 (温暖化対策)

地域計画の策定に向けて

1. 目標地図作成の背景（農業への理解を求める）
2. 自分の地域の現状把握と課題（棚卸）
3. 課題解決へのステップ（政策をセットで）
4. 地域関係者からの意向集約（幅広い意見）
5. 地域の意向を集約し、見える化する
「目標地図」の素案作成作業

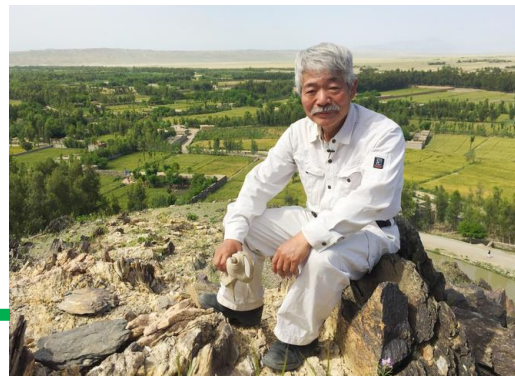
農業委員 ・ 最適化推進委員に 期待すること

1. 地域農業の守護神であり、農業の牽引者
 - * 委員が動けば地域の農業は変わる。
2. 一人での目的達成は困難。
 - * 仲間づくり・応援団をつくろう。
3. 農業者に寄添う農業委員会
 - * あぜ道での声掛けが、まず一步



これからの10年が正念場

おわりに



最近、読んだ本に「アフガニスタンで凶弾に倒れた中村哲医師」の現地で発行された絵本の日本語版を見る機会がありました。

パキスタンのペシャワールを拠点にして、医療行為から始まった支援の内容が、アフガニスタンの田舎で井戸掘りから最後はアフガニスタンの貧しい農村に大河から用水路を引き込む灌漑大事業にまで取組み、60万人の人命と財産を救ったことをあらためて知ることができました。自ら重機を操作し堰を掘り、土壌づくりを指導し小麦の栽培指導をしたりと、常に現場を中心に物事を考え行動し、異国の住民に神とまで崇められたと記載されていました。

私達の農業委員活動も共通する点がたくさんあることに改めて考えさせられました。農業委員会法が見直され新しい農業委員会像を現場は求めていると思います。それを実現するには取り巻く周辺を整えることも必要ですが、自らが現場でできることからスタートし、一步前に進めて後継者にバトンタッチをしたいと思っております。

最後になりますが、つたない話となりましたが、ご清聴いただき感謝申し上げます。異常気象が続きます。お互い健康に留意して活動に邁進しましょう。

(参考) 長野市若穂地区における取組Q&A

これまで、講演した中で出された質問を
取りまとめましたので、参考にご覧ください。

この事業で 特にエネルギーを費やした点

- 1. 住民・地権者への理解と説得**
- 2. 現役農家の生活保障**
- 3. 土地に対する執着心**
- 4. 役員 すべてボランティア活動**

住民・地権者への理解と説得

Q1. どのようなきっかけで、だれが発意し、リーダーは？

A 荒廃地が目につくようになり、農村集落の存続が危ぶまれる状況が10年以上続いていた。だれかやってくれないか、やるだろうの模索が潜在的期間としてあった。結果的には農業委員が研修会でこの制度を知り、火をつけ、地元の核となる農業者に相談し、準備会設立に至った。

Q2. 仲間をどう募ったか。その時に農業者や関係者にどのような働きかけをし、共感を得たのか。

A 仲間づくりの核は農業委員・推進委員とその経験者、専業農家で若手リーダー、JA理事、区長経験者など集落への理解と愛着を持っている仲間。地区の農業実態と将来像を書面にまとめ、準備会設立に動く。
それぞれのメンバーは現状の農業、とりわけ果樹営農で生計を立てている仲間であり、課題に対する共有意識に大差はない。
地区住民へは新年会や区総会、部会の集まり時に準備会の趣旨を書面して説明、配布を行い、複数回行った。個人的な説明も数えきれないほど行った。

関係行政、JA等への働きかけは

Q3. 行政、JA等の誰にどう話を持ち掛け、協力を得たのか？

A 地元の区長会、地権者（現役農家）、担い手候補者の意思がまとまり、地域の方向性が確認できた段階で、行政（県長野地域振興局・長野市農林部）に相談を持ちかける。並行してJAのトップを訪問し、地元の意向と支援をお願いします。

行政は地元がまとまっているのであれば全面的に支援する旨の回答。ただし、初めての事業であり大変ですよのコメントをいただく。（半信半疑）
今思えば、換地業務がこれほどまでに大変とは。

Q4. 難しかった点は何か、またその困難をどう乗り越えたのか？

- A
- ① 一番大変なことは地権者が150名近くおり、筆数も500枚を超え、相続もされてない土地が多数あり、事業の協力同意を得ること手法や情報収集にエネルギーを費やした。この時に行政（とりわけ、長土連・長野市農業公社等）の動きと支援はすばらしく改めてその底力を感じた。
 - ② 地域集会は相当数実施したが、集会の段取りや資料作成の時間、費用工面は大変だった。すべてが手弁当の活動であり自分たちの熱意と夢を追い求めてのエネルギーだった。
 - ③ 地元JA支所職員が会議の会場や事前段取りを支えていただき助かった。
また、事前準備期間にコロナが発症していれば今回の事業はさらに困難を極めたと思う。非常にラッキーだった。

活動はすべて、ボランティア

Q5. 取り組みを行う上で必要なこと、知っておいたほうが良いことは。

- A 日頃、地元の動きや意向を把握して、それを情報として発信すること。
特に、営農や農地の動きは日々変化しているにもかかわらず、営農者や地域のリーダーが課題を共有してない。とりわけ、農地の3年、5年先の利活用ぐらひは情報として持つ必要がある。そうした観点からみると今回の国の法改正による地域計画は、絶好のチャンスと見る。
最近、視察したある県外の生産組合は現業農家に毎年、農地活用アンケートを取り、農地利活用策に先手を打っている事例もある。

Q6. 現段階での感想。

- A 300年前の先人が開拓、開墾した農地は現存している。しかし、現在の営農環境で見ると使い勝手が悪い。時代にあった農地の姿を夢見ていたが、それが実現できて感激している。さらに、中山間地における樹園地の基盤整備事業の先兵として動けたことに感謝している。
今後、県内で国内でこうした事業の実現を求めて、多くの農業者が地域活動を進めると思います。お役に立てることがあれば動きます。
遠慮なく声をかけてください。農業をされていて、毎日が楽しいです。

私のプロフィール

- 1949年 長野市生まれ
- 職業 百姓
- 家族 妻・長男夫婦・孫(3人)



- 人生の歩み
 - ・学業を終了後 大手電機メーカーに勤務
(国内・海外で映像機器の生産と品質管理、営業活動 特に海外勤務では英国に4年間駐在 米ソ冷戦終結を現地で体験)
 - ・55歳で早期退職
その春から約1年間 長野県果樹試験場で研修生として果樹のイロハを学ぶ
 - ・56歳 りんご栽培(70a)で 本格的な農業をスタート
 - ・60歳 「県うまくだコンクール りんごの部」で入賞
 - ・67歳 農業委員活動に携わる
 - ・71歳 長野市農業委員会会長に就任
 - ・72歳 長野県農業委員会協議会会長に就任
 - ・73歳 令和4年度 農地基盤整備事業で農林水産大臣賞を受賞

- ・現在 250a りんご、桃をメインに家族とお手伝い等で営農。
ネット販売・出前販売等の直販・JA出荷。また、りんごのオーナー制等をいち早く導入し、首都圏、関西方面からの顧客開拓。
- ・現在 保護司(更生保護活動)を続けて17年。